

救命士の先輩は、年下わんこ消防士の先輩♡にされました
（毎晩中出し・仮眠室・救急車後部）

体
験
版

第1話

半年ぶりに、
救ってくれた後輩が押しかけてきま
した

「高瀬さん、引き継ぎ、これをお願いします」

桐谷副隊長から手渡された業務日誌に、凜は署名をする。

午前八時。F市消防本部・救急隊の控え室。

高瀬凜、救命士、三十歳。

二十四時間の当直明けの体は、もう自分のものではないみたい
いに重い。

「お疲れさま。今日の合同訓練、出るんでしょ？」

「はい、九時から特救隊と。一度マンション戻って着替えてきます」

「無理しないでね」

控え室を出て、廊下を歩く。

救急隊のフロアは消防本部の二階の北側にあって、特救隊の詰所は三階の南側にある。

別棟扱いの渡り廊下で繋がっているが、出勤シフトが噛み合わないかぎり、互いの顔を見る機会はほとんどない。

先月、隣市本部からこのF市本部に異動してきて、一度も特救隊の彼の顔を見ていなかった。

半年前、自分を救ってくれた、あの人の顔を。

「先輩」

声がした。

階段を下りきった一階のロビー。

壁際にもたれて立っていた青年が、こちらを見て手を上げた。

黒髪の短髪。日焼けした首筋。鍛えた肩幅。

半年前、瓦礫の中で抱き起こされたときの、あの匂いがした。

(……宇佐美くん)

心の中で名前を呼んだ瞬間、体の奥が小さく跳ねた。

凜はそれを気のせいだと思うことにした。

「久しぶりですね。覚えてますか？」

「もちろん。半年前は……ありがとう、宇佐美くん」

律はすこし眉を寄せて、それから口の端だけで笑った。

「宇佐美くん、じゃないですよ。先輩、俺の名前、知ってますよね」

「うん……、律、くん」

「『くん』、いないです」

まっすぐ見つめてくる目が、二十六歳の男の目だった。

弟みたいな顔、ではなかった。

凜は視線を逸らした。

その日の合同訓練は、別チームに振り分けられた。

救急隊の凜は搬送訓練に、特救隊の律は瓦礫救助訓練に。

ロープを担いだ律が遠くで指示を出している姿を、凜は何度か目で追いそうになって、そのたびに自分の手元を見た。

夕方、訓練の解散後。

ロッカールームを出た凜はふいに千鶴に声をかけられた。

救急隊で凜と組むことの多い、年下の後輩。

律とは消防学校の同期だった。

「凜先輩、聞きました？ 宇佐美が今日、半年ぶりに先輩のこと会ったって」

「うん、ロビーで」

「ずっと言ってたんですよ、あの人。『救ったあの先輩、いま、どこの本部にいるんだろう』って」

千鶴の声は無邪気だった。

凜は曖昧に笑った。

（半年……誰だって、忘れるのが普通だ）

そう自分に言い聞かせて、控え室で残務を片づけてもう一度、夜の当直に入った。

翌日の朝七時。

二日連続の二十四時間勤務を終え、凜はようやく本部の正面玄関を出た。

春の朝の空気は薄く湿っていて、白衣の襟が首筋に冷たい。
マンションまで歩いて十分。

大通りに出るために、本部前のコンビニの角を曲がろうとした、そのときだった。

「先輩」

角の向こうに、律が立っていた。

黒い革ジャンに白いTシャツ。

もう特救隊員ではなく、二十六歳の青年として、そこに立っていた。

「迎えに来ました」

「…………え？」

「当直明け、夜の道、危ないですから」

「朝、なんですけど」

「明け方も入れて夜です」

言い方がもう半年前の救助の青年と違っていた。

凜が困った顔を見ると、律は黙って凜の手から白衣の入った紙袋を取り上げた。

「マンション、こっちですよね」

「……知ってるの？」

「半年前、救急車で運ばれた先の病院、覚えてます。そこから一番近い独身者向けのマンション、調べました」

「ちよ、それ、ストーカーじゃ……」

「先輩」

律が立ち止まった。

まっすぐ凛を見て、低く言った。

「半年、待ったんです」

凜の足が止まった。

（待った、って、何を……？）

律はそれ以上は言わなかった。

また歩き出した。

凜は白衣の紙袋を持って先を歩く律の背中を見送るしかなかった。

マンションのエントランス。

オートロックを解除した凜が紙袋を返してもらおうと振り返ったときには、もう律は凜のすぐ後ろにいた。

「先輩」

「……お礼、するから、ここで」

「上、行ってもいいですか」

律の指が、凜の手首を、軽く掴んだ。

鍛えた、太い指だった。

「半年、待ったので」

玄関に入った瞬間に、白衣の紙袋が床に落ちた。

律が後ろ手にドアを閉めた音と、凜の背中が壁にぶつかった音が、ほとんど同時だった。

「先輩」

律の声が、低い。

「半年、本当に長かったんです」

律の唇が、凜の唇に重なった。

ぬるい、と凜は思った。

二十六歳の男の体温が、自分の唇の温度より、わずかに高い。

（あったかい……っ）

律の手が、凜の白衣のボタンを外した。

一個。二個。三個。

その指が、震えていた。

「宇佐美く……っ」

「律です。先輩。律」

「り、律……」

「もう一回」

「り、っ……」

褒美のように、律が凜の鎖骨を吸った。

ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡

肌に、湿った音が三つ続いた。

凜のひざが折れた。

律が腰を支えた。

「ベッド、奥ですよね」

「あ……」

律が凜を抱き上げた。

救出のときと同じ抱え方だった、と凜は気づいて、それで顔が熱くなった。

ベッドに下ろされた凜のジャケットを、律が引き抜いた。

ブラの上から、律の唇が胸の谷間を吸う。

ちゅるっ♡ ちゅるっ♡ ちゅるるっ♡

「やだ、待つ、ま……」

「先輩、待たないです。半年、待ったのは俺だから
ブラを下にずらす指。

現れた乳首に、律の舌が落ちた。

「あっ、あっ♡」

ぺろぺろぺろ♡

ぺろ♡ ペろ♡ ペろお♡

（やだ、こんな、舐め方……っ♡）

凜の腰が、勝手に跳ねた。

律の指が、スカートの下のストッキングを、両手で破った。

ぴしっ、と音がした。

「あ、それ、買ったばかりか……っ」

「弁償します」

「弁償って、あ、ちょ、待つ、宇佐美く……」

「律」

「り、律、ま、待つ……」

「待たないって、言いました」

律の指が、凜の下着の上から、すべった。
すじをなぞるように、上から下へ。

くちゅっ♡

「ひっ……っ♡」

「先輩、もう、こんな」

律の指が、下着の脇から、中に入った。

（あ、入って、来ちゃっ……）

ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡ぬちゅるっ♡

律の中指が、凜の中で、ゆっくり動いた。

「あっ、あ、あ、り、っ、それ、まっ、わた、わたし……っ

♡」

「先輩のここ、ぎゅうぎゅう」

くちゅくちゅくちゅくちゅっ♡

ぐちゅぐちゅぐちゅっ♡

「あゝ、あゝ、らめ、らめえ……っ♡」

(やだ、こんなに、すぐ、来ちゃ……っ♡♡)

凜の腰が、シーツの上で、はねた。

律の親指が、凜のお豆を押した。

「ひいっ、っ、っ……♡♡」

ぴゅっ♡

律の指の先で、凜が一度、軽く達した。

「先輩、上手ですね」

「ば、ばか……」

「褒めてます」

律が指を抜いた。

ぐぼっ♡

その指を、自分の口元に運んで、舐めた。

「美味しい」

「みないでえ……」

「見ます」

律のベルトが緩む音。

ジーンズを下ろす音。

凜が目を逸らす前に、律のおちんちんを、見てしまった。
大きい、太い、と凜は思った。

（嘘、入る、わけ……っ♡）

「先輩、ゴム、します。それは、絶対です」

律が一拍だけ理性を見せた。

財布から取り出した銀の包みを、丁寧に開けた。

「あ……」

着けたあと、律が凜の脚を、両手で開いた。

ぐっ、と。

「先輩、入ります」

「ま、待つ、り、っ、待つ……」

「待たないって、何回も言いました」

律の先端が、凜のおまんこに当てられた。

くちゅ……っ♡

濡れた音が、自分の体から、した。

「あ、あ、来ちゃ、来ちゃ……っ♡」

「行きます、先輩」

ぼちゅっ♡

ぼちゅっ♡

ぼちゅぼちゅぼちゅっ♡

律が奥まで来た。

「あゝ、あゝ、あゝ、ふか、深、深い……っ♡♡」

「先輩のここ、すごく俺の形になってる」

（やだやだ、こんな、奥まで……っ♡）

律の腰が、ゆっくり動き始めた。

ぱちゅっ♡　ぱちゅっ♡　ぱちゅぱちゅぱちゅっ♡

「あ、あ、り、り、っ、り、っ……っ♡♡」

「先輩、上手」

律の手が、凜の胸を、揉んだ。

乳首をつまみ、こねた。

こねこねこねっ♡

凜の声が、半音、上がった。

「やっ、らめ、らめ、両方は、らめ……っ♡♡」

「両方します」

律の腰の速度が、上がった。

ぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅっ♡

ぐぽぐぽぐぽぐぽっ♡

じゅぽじゅぽじゅぽっ♡

「あゝあゝあゝもう、もう、らめ、いつちゃ、いつち

や……っ♡♡」

（堕ちる、堕ちちゃう、こんな後輩に、堕ちちゃう……♡）

「先輩、いっていいです。俺の前で、たくさん」

「あ、り、っ、り、っう……っ♡♡」

凜の口から、意味のある言葉が、もう出ない。

律の腰は、止まらない。

ヌココツ♡ ヌココツ♡ ヌココツ♡

「先輩、俺の名前、ちゃんと」

「り、っ、り、っ、り、っ♡♡」

「上手」

律の手が、凜の頬を撫でた。

その優しさが、いちばん、ずるい。

（やだ、こんなの、こんな……っ♡♡）

凜が二度目に達した。

大きく、達した。

「あゝ〜〜〜〜♡♡」

ぐっと反った凜の腰を、律が押さえつけた。

ぱちゅんっ♡ ぱちゅんっ♡ ぱちゅん、っ、ぐっ……♡

律の腰が、最後、深く沈んだ。

「先輩、いきます」

「うん、うん、来てえ……♡」

ゴム越しに、律のおちんちんが、奥で震えた。

ぶびゅっ♡ ぶびゅびゅっ♡

律の額に、汗が一筋落ちた。

凜の頬に、それが垂れた。

「先輩」

律が凜の耳元で、囁いた。

「まだ、抜かないです」

「え……」

律のおちんちんが、凜の中で、まだ太いままだった。

（うそ、まだ、こんな……っ♡）

凜の中が、ぴくっと、勝手に動いた。

「先輩、わざとですよね」

「ち、ちが……」

「お返しです」

律が凜の膝裏を押し上げた。

凜の腰が、シートから浮いた。

（や、姿勢、変わっ……♡）

律がゆっくり腰を引いた。

ぐぼっ♡

亀頭が、凜の入り口で、止まった。

「あ、あ、ぬく、ぬくの……?」

「抜きません」

律の親指が、凜のお豆に触れた。

くりくりっ♡

くりくりくりっ♡

「ひっ、ひう、っ、っ……♡♡」

「先輩のお豆、ぷっくりしてますね」

（や、こんな、言い方……っ♡）

くりくりこねこねっ♡

こねこねこねこねっ♡

「あゝ、らめ、いま、いまさわっちゃ、らめえ……っ♡♡」

「敏感、先輩」

律がお豆を、つまんだ。

きゅっ、と軽く。

「ひいっ……♡」

凜の中で、律のおちんちんが、ぴくっと、震えた。

律が口の端で、笑った。

「先輩いま、俺のこと、締めましたね」

「ち、ちが……」

「違わないです」

ぼちゅっ♡

律がまた、奥まで来た。

「あゝゝゝ♡♡」

二度目の挿入は、深かった。

凛の中がもう律の形を覚えていた。

ぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅ♡

ぐぼぐぼぐぼ♡

「あ、あ、り、つ、はや、はや……っ♡♡」

「もっと、声」

律の腰が、急に、深くなった。

パチュンパチュンパチュンパチュン♡

ガツガツガツ♡

「ふあ、ふあ、ふあ、ふあ♡♡」

（こわれる、こわれちゃ……♡）

律の指が、凧の唇に触れた。

「先輩、舌」

「ふあ……っ」

凧の舌が、律の指の上で、震えた。

律の指が、舌を、こねた。

ねちゃねちゃっ♡

ねちゃねちゃねちゃっ♡

「ふぁ、り、つ、もう、もう、らめえ……っ♡♡」

「先輩、いいですよ、何度でも」

律の指が、凜の舌から離れた。

代わりに、凜の頬を、両手で挟んだ。

「先輩、こっち見てください」

「ん、ん、ん……っ♡」

凜の目が、律の目と、合った。

律の瞳の奥に、半年分の何かが、あった。

（や、こんな目、しないで……っ♡）

律がゆっくり笑った。

二十六歳の男の、笑い方だった。

「先輩、俺の」

言いかけて、律は続きを飲み込んだ。

代わりに、凜の唇を、塞いだ。

ちゅるるるっ♡

ちゅぱちゅぱっ♡

律の舌が、凜の口の中で、暴れた。

「ん、ん、ん……っ♡♡」

律の腰は、止まらない。

ぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅっ♡

ヌココッヌココッヌココッ♡

じゅぼじゅぼじゅぼじゅぼっ♡

「んゝゝゝ♡♡」

唇を塞がれたまま、凜が達した。

全身が、ばちっと、跳ねた。

律が唇を離した。

「先輩、もう一回」

「もう、らめ……っ♡」

「もう一回」

律の腰が、最後の三回深く入った。

ずちゅっ♡

ずちゅっ♡

ずちゅうんっ♡♡

ゴム越しに、律のおちんちんが、二度目の精を出した。

ドビュッ♡ ドビュビュッ♡ どぷっ♡

「あゝゝゝゝ♡♡」

凜の体が、シーツの上で、跳ねた。

律の指が、凜の汗ばんだ前髪をそつと横に流した。

「先輩、上手でした」

「ば、ばか……」

「褒めてます」

「先輩」

律が凜の中からゆっくり抜いた。

ぐぽっ♡

使い終わったゴムを、丁寧^{ていねい}に、ティッシュにくるんだ。

「ちょっと、待ってください」

律が、ベッドの脚元に、降りた。

凜の脚を、両手でぐっと開いた。

「あ、ちょ、何して……」

「先輩のここ、ちゃんと見せてください」

「やだ、見ないで、もう、らめ……」

「見ます」

律の顔が、凜のおまんこに近づいた。

息がかかる距離だった。

律が舌を出した。

ぺろっ♡

「ひいっ……っ♡」

凜のお豆が、律の舌先で、押された。

ぺろぺろぺろっ♡

ねろねろねろっ♡

ちろちろちろっ♡

「あゝ、あゝ、らめ、いまさわっちゃ、らめえ……っ♡♡」

ぺろぺろっ♡

ちゅるるっ♡

律の口が、凜のお豆を、啜えた。

じゅぱっ♡

じゅぱじゅぱじゅぱっ♡

「ひい、ひい、ひい……っ♡♡」

（うそ、舐め、舐めるの、こんな……っ♡）

律の舌が、お豆の上で、転がった。

ねちゃねちゃ♡

ねちゃねちゃ♡

「あゝ、いっちゃ、また、いっちゃ……っ♡♡」

「いいですよ、先輩。何度でも」

ちゅぱちゅぱちゅぱ♡

じゅるじゅるっ♡

「ふあ〜〜♡♡」

凜がまた、達した。

律の口元が、凜の体液で、濡れていた。

律が口元を、手の甲で、ぬぐった。

「先輩、味、覚えました」

「みないでえ……」

「覚えてただけです」

律が、ベッドに、戻ってきた。

もう一枚、ゴムを出した。

着けた。

「先輩、次は上に乗ってください」

「えわたし、上？」

「俺の上です」

律が仰向けになった。

凜の手を引いて、自分の上に、跨らせた。

「やだ、これ、見え、見えちゃう……」

「見ます」

凜の腰を、両手で、掴んだ。

ぐっと、下に、降ろした。

ぼちゅっ♡

「あゝゝ♡♡」

律のおちんちんが、下から深く入った。

最初の挿入とは、違う角度だった。

（や、奥、奥、ちが、ちが……っ♡♡）

凜が律の胸に、両手を、ついた。

律が下からゆっくり腰を、動かした。

ずちゅっ♡ ずちゅっ♡

「あ、あ、り、つ、これ、これ……っ♡」

「先輩、自分で動いてください」

「え、わたしが？」

「先輩の好きな、深さで」

（や、こんなの、こんな……♡）

凜の腰が、おそるおそる、動いた。

律の親指が、凜のお豆に、また、触れた。

くりっ♡

「ひいっ♡」

くりくりくりっ♡

「あ、あ、り、っ、それ、両方、らめ……っ♡♡」

「両方します」

凜の腰が、勝手に、速く、動いた。

ぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅっ♡

ぐぽぐぽぐぽぐぽっ♡

「あゝ、あゝ、らめ、らめ、自分で、らめえ……っ♡♡」

（こんなの、はずかし、はずかしいのに、止まらな……っ♡）
律が下から、腰を突き上げた。

ガッガッガッ♡

パチュンパチュンパチュン♡

「ひいっ、ひいっ、ひいっ……♡♡」

「先輩、いきますね、三回目」

「うん、うん、いっしょ、いっしょに……♡」

律の腰の突き上げが、最深になった。

ずちゅううんっ♡

ずちゅううんっ♡♡

ドプッ♡ ドビュッ♡ どぷん、どぷん……♡

ゴム越しに、律のおちんちんが、三度目の精を出した。

「あゝ〜〜♡♡」

凜の体が、律の上で、大きく、しなった。

そのまま、律の胸に、倒れた。

律の腕が、凜の背中を、優しく、抱いた。

しばらく、二人とも動かなかった。

律の体重が、凜のお腹の上でゆっくり呼吸していた。

「……先輩」

「……うん」

「ありがとうございます」

「え？」

「半年前、生きててくれて、ありがとうございます」

凜は答えられなかった。

涙が勝手に出てきたのを、律の唇が頬で受けた。

律の半年が、凜の指先に触れはじめていた。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。

選択も、関係も、そして——結果も。

知らないまままで終わるか、

それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。